

弥生開始期の集団関係

古河内瀧沿岸の場合

Interaction between the Jomon Farmer and the Yayoi Farmer
in the Beginning of the Yayoi Period along the Old Kawachi Lake

藤尾慎一郎

FUJIO Shin'ichiro

はじめに

- ①問題の所在
 - ②共存期の確認—長原式新とI-1-古—
 - ③炭素14年代の導入
 - ④近畿における弥生稲作開始期の特質
- おわりに

【論文要旨】

本稿は、水田稲作が大阪平野でどのように始まったのか、そのプロセスやメカニズムを、ヨーロッパ先史考古学のフロンティア理論を用いて考えたものである。30年ほど前からこの地域における水田稲作の開始問題を論ずる場合には二つの大きな考え方があった。一つは本地域の西方から水田稲作民がやってきて入植し、もともと住んでいた在来の採集狩猟民である近畿縄文人と共存して、その中で交流が始まって水田稲作が広まったという「移住説・外来説」「住み分け説」と、近畿縄文人が水田稲作の技術を受け入れて、農耕民に転換していったという「自生説」である。この二つの解釈の根拠は、地元の人びとが使うと仮定された縄文系土器と、西方からやって来た人びとが使うと仮定された遠賀川系土器との関係にある。すなわち両者が同時に存在していたのか、それとも時期差なのかという点である。大阪平野では二つの土器群が確実に共存する遺構がほとんど知られていないので、これまで同時存在なのか時期差なのか決め手に欠ける状況が続いていた。

本稿では、二つの土器群に付着する炭化物の炭素14年代値をもとに算出した土器群の較正暦年代を使って比較したところ、二つの土器群の一部が同時に存在していたことがわかった。その期間は100～150年にも達する。しかもこの期間の水田は定型化した灌漑施設をもつものではなく、土器自体も弥生土器として定型化する前の段階にあたることから、縄文社会が水田稲作を始めてから弥生社会へと転換するための準備期間に相当し、定型化するまで100～150年を要したことを意味している。

このように縄文文化的な特徴が色濃く残る大阪平野の弥生I期前葉は、少数のニューカマーと多数のネイティブとの接触交流によって、ニューカマーのもつ文化に100年以上かかって地域全体が統合されていくというフロンティア理論に近いことがわかった。水田稲作が始まるやいなやきわめて短期間のうちにコメの生産量を増大し、社会が急速に発展したという従来の説明とはほど遠い状況だったことを明らかにした。

【キーワード】 相互交流モデル、在来人、長原式土器、遠賀川系土器、古河内瀧、近畿、弥生

はじめに

紀元前5～紀元前4世紀ごろに九州北部で始まった本格的な水田稲作は、紀元前3世紀の中頃には近畿地方に伝わり、急速に近畿各地へと拡散して、近畿弥生社会の生産基盤となっていった。こういった従来の考え方は、数十年スパンで型式変化する土器から想定される時間の流れを前提としたものである。ところが、炭素14年代値にもとづく較正暦年代に依拠すると百年スパンで型式変化する土器から想定される時間の流れを前提とすることになり、ゆっくりとした時間の流れの中で社会の発展を描くことになるため、まったく異なった弥生社会像が描かれることになる。

たとえば紀元前10世紀後半ごろに九州北部で始まった本格的な水田稲作は、300年あまりの時をかけて紀元前7世紀後半に近畿地方西端の神戸に達し、間もなくして古河内潟沿岸に到達する。九州から近畿まで約300年の時がかかっていることになる〔春成2007〕。しかも神戸で始まってから奈良で始まるまでに100年近くかかっている。数十年スパンの土器の型式変化から百年スパンの型式変化に時間軸を変えたとき、そこにみえてくる近畿弥生社会のイメージは、なかなか広まらない遅々とした水田稲作を前提としたものになる。

この長期編年ともいえる時間軸を、大阪平野の弥生I期前葉を舞台に展開されてきた、いわゆる「住み分け説」と「自生説（時期差説）」に適用したときにどうなるのか、これが本稿の目的である。従来の年代観の場合、住み分け説の立場をとる研究者であっても共存期間は長くて1世代と考えていたが、較正暦年代では100～150年となり、人にたとえると4～5世代にわたって続いたことを意味する。つまり、住み分けの立場をとった場合、出自や生業を異にする人びとが、100～150年も一つの地域に併存し、新しい生産システムは地域全体になかなか広まらなかったことになる。

このように時間幅の取り方によって大きくその意味が異なってくる住み分け説と自生説の、どちらが成り立つのかを解決するために、本稿ではII章で、長原式土器と遠賀川系土器との関係を明らかにして、この地域の土器編年を整備する。III章で最終末の縄文土器と最古の弥生土器の炭素14年代測定結果を検討する。すでに小林謙一・春成秀爾・秋山浩三によって神戸・大阪・奈良地域の年代測定結果が報告されているので、測定値はこの成果を用いる〔小林・春成・秋山2008〕。測定値が得られた長原式が、遠賀川系土器に伴うのかどうかを炭素14年代を使って確定する。

近畿地方の水田稲作開始期は炭素14年代の2400年問題と呼ばれている時期にあたり、基本的にI期古・中段階の土器の炭素14年代値は2400～2500¹⁴C BP台に含まれる。どの測定値も2400年問題の中にあるので同じ測定値を示す炭素14年代値同士を単純に比較しても、較正年代が同じかどうか、つまり同時期かどうかを精確には決められないという問題がある。また較正年代に直すと存続幅が300年をこえる場合もあるので同時併存といえるのかどうかという問題もある。

そこで土器型式を用いたウィグルマッチ法を適用して、土器型式ごとに較正曲線上にプロットしていくことによって、各型式の位置を求めた。

一方、長原式と同じ炭素14年代値をもつ遠賀川系甕といわれているもののなかには、地元の人びとが伝統的な技術を駆使して作ったと考えられるもののがかなり含まれているので、外来集団が移住してきて作ったとは考えにくい。しかもI期前葉段階における水田構造の稚拙さや大陸系磨製石

器の少なさなど、本格的な水田稲作が定着していないことを予想させる。

以上のように100～150年にわたる長原式と遠賀川系土器の同時併存中における弥生化の過程から浮かび上がってくる近畿弥生社会の成立過程は、外部から水稲農耕民がやってきて、社会が急激に変わっていくという状況とはほど遠いものがある。讃岐からやってきた可能性のある水稲農耕民も存在したのであろうが、彼らが大人数で水田開発を推し進めたという状況を考古学的に支持する材料はない。

このような特徴をもつ近畿弥生Ⅰ期前葉の社会状況を、ヨーロッパ先史社会のフロンティア理論 [Dennel 1985] を用いてモデル化したのがⅣ章である。つまり紀元前6世紀ごろ、縄文文化段階にある地元の長原式土器を用いる人びと（縄文農耕民）が水田稲作を生産基盤とする遠賀川系土器を用いる人びと（弥生農耕民）に直面した際、それを受け入れるために在来民の母集団から離れたフロンティアが外来民ともに作った村（若江北や水走）と、母集団に残った人びとの村（長原）という、対応を異にした人びとに分かれたという図式で理解できると考えるにいたった。母集団はもともと縄文的な生態系の中に集落をつくっているし、フロンティアを含む弥生農耕民は水田稲作に適したところに集落を構えるので、結果的に住み分け状態となる。若江北や水走の人びとは水田稲作をおこなう弥生農耕民、長原は縄文的な農耕をおこなう、いわゆる園耕民である。讃岐出身の人びとが含まれているとしたら、それは若江北や水走などの集落であろう。二つの土器群が混在して出土するのは、母集団とフロンティアとの接触交流の結果であり、交流期間は較正年代からみて150～100年ぐらいであったと考えられる。両者の間にはやがて紀元前6世紀後半以降になって集団の再編成が起こり、ニューカマーの文化にネイティブの文化は吸収・統合され、土器も第Ⅰ期中段階を指標とする遠賀川系土器に統一される。近畿中期社会の構築にむかって動き始めるのである。

①……………問題の所在

一 住み分け説

弥生Ⅰ期前葉の近畿弥生社会を論ずる際の考古資料といえば、縄文晩期後半の突帯文土器を祖型とする突帯文系土器と、新しく創造された遠賀川系土器という系譜を異にする二つの土器群で、これらの出土状況をめぐってさまざまな議論がおこなわれてきた。この時期の遺構自体がもともと見つからない大阪平野において、系譜を異にする二つの土器群が、良好な出土状況で見つかることはまずないため、層位学的に二つの土器群の同時性を証明する証拠はほとんどない。ただ、包含層の中で混在して見つかることは多い。弥生文化の研究者は包含層とはいえ混在して見つかることが多いことを重視し同時性を認める傾向が強いものに対して、縄文文化の研究者は遺構に伴うものではないと厳密に評価して時期差とみる傾向が強い。

1970年代まで、近畿における弥生Ⅰ期の突帯文土器といえば、Ⅰ期中段階以降の突帯文系土器である太田型甕しかなく、またⅠ期古段階の突帯文系土器が欠落していたこともあって、議論は活発でなかった。一転したのが1980年代の大阪市長原遺跡の調査である。長原式土器が船橋式に後続する晩期最終末の突帯文土器として位置づけられたことから、遠賀川系土器に併行するのか、遠

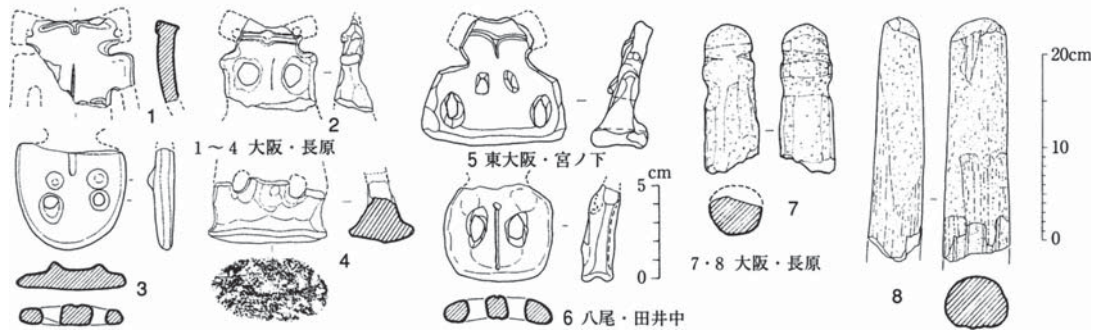
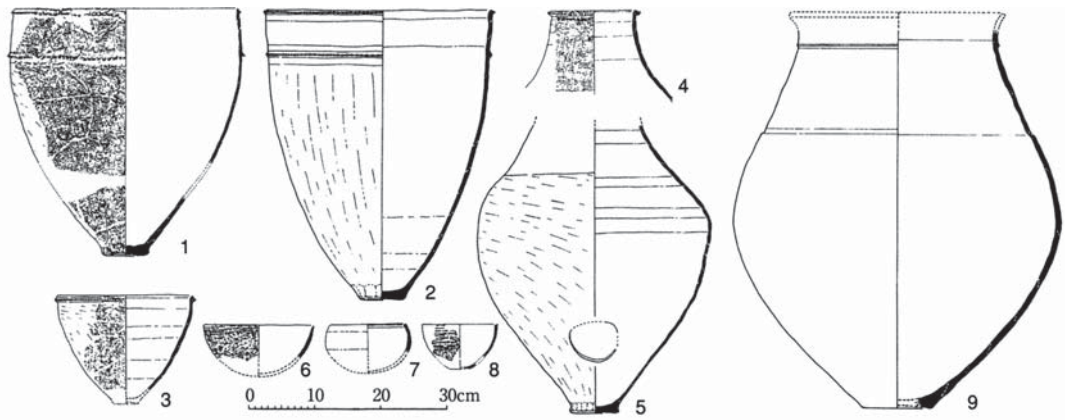


図1 大阪市長原遺跡出土の土器と縄文系祭祀遺物[春成 2007]



図2 近畿の長原式と遠賀川式の遺跡の分布[春成 1990]

賀川系土器出現以前に消えるのかをめぐって議論が活発化した。

一足先に弥生前期の突帯文系土器の研究が進んでいた九州の研究者は、筆者も含めて長原式を弥生前期の突帯文系土器として位置づけていたが、長原式には浅鉢や土偶・石棒などの縄文祭祀遺物が伴っていたこともあって（図1）、晩期最終末に位置づけられたという経緯があり、それがいまでもこの土器の時間的位置づけに大きな影響を与えている。

弥生文化の研究者は、長原式を遠賀川系土器と同時期と見なした上で、共伴の意味を、近畿弥生社会成立期の特質を表すものと考えた。つまり見た目の異なる土器を使う人びとは、生業なり、出自なりを異にするという前提のもとに集団関係論を展開したのである。

中西靖人は、長原式の比率が高い遺跡と、遠賀川系土器の比率が高い遺跡を抽出し、それらが立地を異にしていることを根拠に住み分け説を提示。用いる土器の比率の違いは生業が異なることを意味していると考えた [中西 1984]。この場合に想定されているのは、水稻農耕民か、縄文農耕民かである。また水稻農耕民の出自について、近畿以西から河内に入ってきて地元の縄文人と住み分けたと考えている点に特徴がある。

同じく外からの水稻農耕民の移住を想定するのが春成秀爾と森岡秀人である。春成は、二つの土器群の比率の多い少ないではなく、細かな比率の違いを問題にして、遺跡ごとに異なる共伴率の違

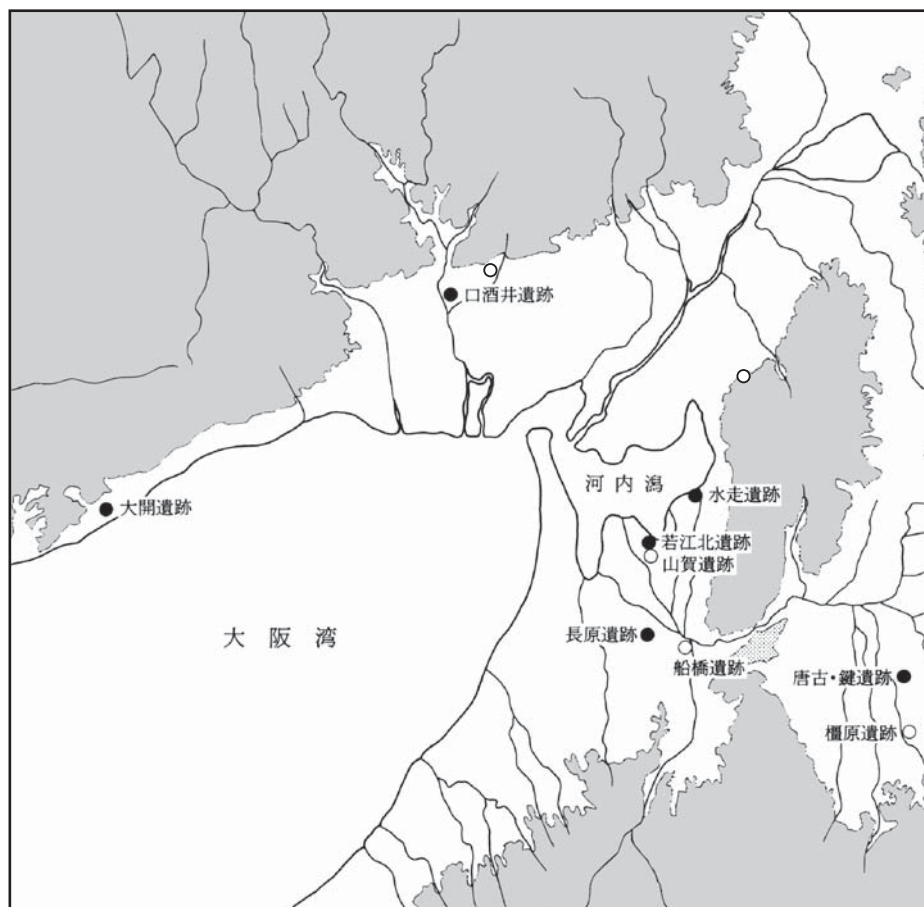


図3 近畿における突帯文・突帯文系、遠賀川系土器の分布(黒丸はとりあげた遺跡、白抜き丸は主要遺跡)

いを、地元の人びとと西からやってきた人びととの接触交流度の違いと考えて四つにグループに分けている(図2)[春成1990]。たとえば遠賀川系土器の比率が高いのは、山賀遺跡など古河内潟の沿岸に住む外来系の水田稲作民の一つだけである。それに対して在来系の人びとは外来系の人びととの接触交流度によって三つに分かれる。扇状地の最高所に集落を構える鬼虎川遺跡では圧倒的に長原式の比率が高く、農耕民との間で毛皮や獣肉と交換を行っていたと考える。古河内潟の入り口に位置する森ノ宮遺跡は、その地理的位置から交流度が鬼虎川遺跡より高かったので遠賀川系土器の割合が少し高い。もっとも内陸の高位沖積部に集落を構える長原遺跡は、縄文的なマツリを盛んにおこなっていた集団で、遠賀川系の甕は基本的に出土しない。

森岡秀人は、出自も異にする水田稲作民が西からやってきて住み分けると考える[森岡1990]。

筆者も1991年に住み分けの実態ついてさらにつっこんだ議論をおこなった[藤尾1991]。外から入ってきた水稲農耕民が、在来民のテリトリーの中に入って住み分けの場合と、テリトリーの外で住み分けの場合の二つに分け、前者を領域内住み分け、後者を領域外住み分けとよんだ(図4)。弥生前期末の福岡県小郡市内の弥生集落遺跡にみられる、後期無文土器の出方を念頭においた議論である。前者の場合は特に在来民との間で密接な関係が存在したと予想されるので、のちの共生説にもつながる考え方といえよう。

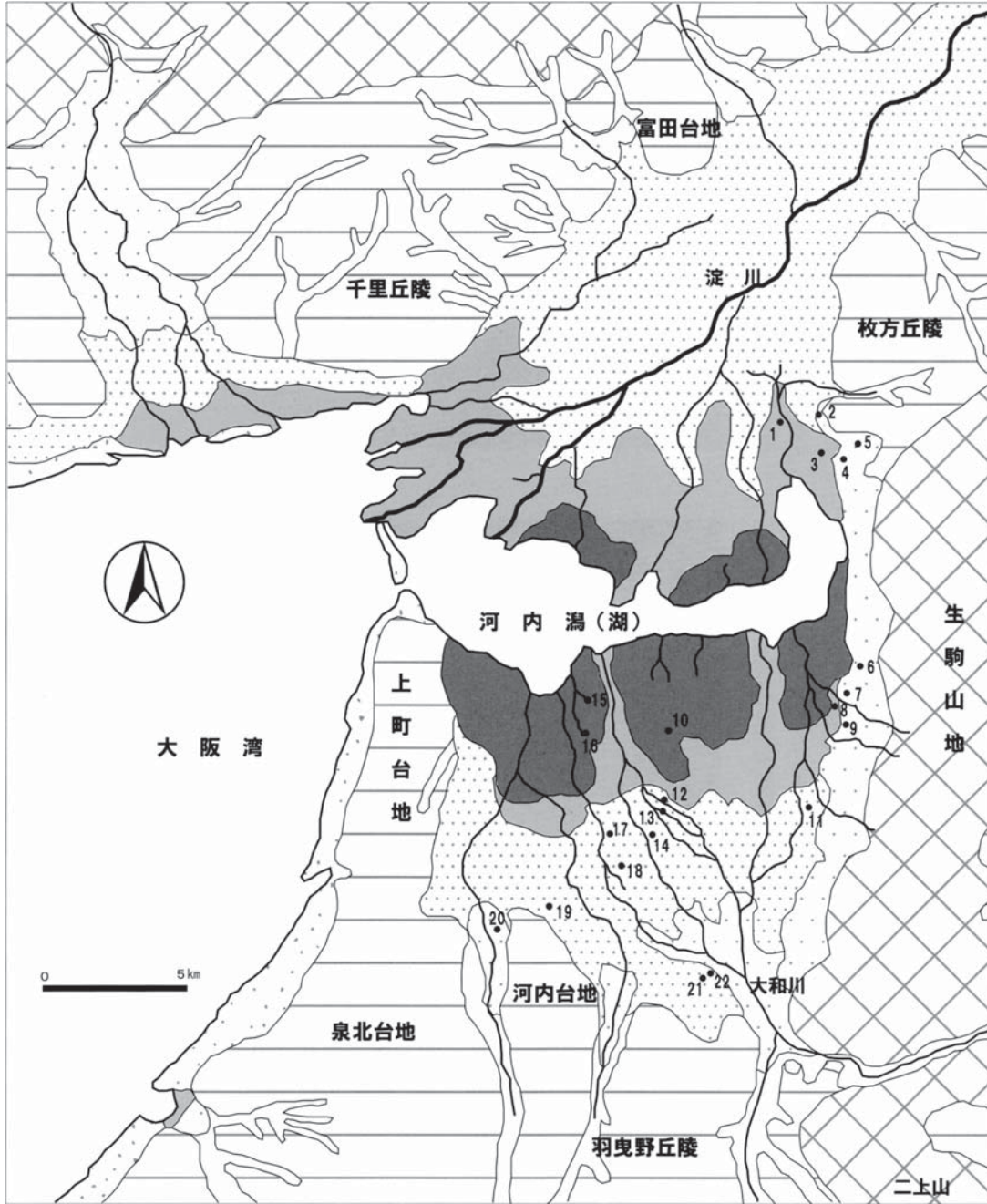
外から移住してきた人びとの出自については漠然と西方と考えられていたが、具体的に讃岐からと予想させる考古学的事実が明らかになった。讃岐産のサヌカイトが、古河内潟沿いの遠賀川系土器を多く出す遺跡から多く見つかることがわかったのである。大阪平野では縄文後期から讃岐産のサヌカイトがみられるようになるようだが、弥生I期になると急増することから、西方からの水田稲作民の入植と、サヌカイトの産地である讃岐が結びつけられたのである。

サヌカイト以外にも、壺形土器にみられる製作技法のクセ、漁撈用の土錘、一木鋤など、讃岐との関係をうかがわせる資料がある。一方、長原遺跡では地元二上山のサヌカイトが依然として使われつづけていたことも、住み分け説を主張する春成説や森岡説の追い風となったのである。

その後調査された東大阪市の若江北遺跡、水走遺跡、大阪市田井中遺跡でも長原式と遠賀川系土器が混在することが確認され、とくに長原遺跡よりも内陸にありながら遠賀川系土器の比率が高い田井中遺跡の存在は、古河内潟沿いの低地に遠賀川系土器を使う人びとがいて、後背地に長原式土器を使う人がいるという住み分け状態を、単純には説明できないことを明らかにしたのである。このような考古学的事実をふまえて田中清美の「新住み分け論」[田中2000]も提唱された。

一方、土器を対象とした細かい分析からも同時併存を示す証拠が示され始めた。三好孝一や田畑直彦らによって、縄文・弥生の同化過程を示す土器(縄文系弥生土器)が抽出され、筆者も遠賀川系甕のなかに、突帯文系土器の製作技法、器形、調整技法をもつものが含まれていることを指摘し[藤尾編2001, 藤尾2003b]、近畿の遠賀川系甕が突帯文系甕を母体に地元の人びとによって漸進的に創られていたことを明らかにした。

土器にみられる同時性と協調性をふまえて秋山浩三は「共生説」を主張する[秋山1999]。秋山は、遠賀川系土器の出現時にはすでに長原式が存在していたので、I期古・中段階にわたって共存する期間は長いと考える近畿の弥生研究者の考え方を紹介している。また突帯文土器集団が存在する領域の一角に、新来の遠賀川系集団の本格的な環濠集落が新たに形成されるというか、形成を許



参考文献などを参考にして作成

- | | | | | | | | | | |
|--|-------|--|-----------|--|------|--|-------|--|------|
| | 砂浜・浜堤 | | 干潟が離水した部分 | | 三角州帯 | | 自然堤防帯 | | 扇状地帯 |
| | 開析谷 | | 段丘・台地・丘陵 | | 山地 | | | | |
- 1.長保寺遺跡 2.高宮八丁遺跡 3.讃良郡条里遺跡 4.砂遺跡 5.更良岡山遺跡 6.日下遺跡 7.植附遺跡 8.鬼虎川(水走)遺跡
 9.鬼塚遺跡 10.新家遺跡 11.池島・福万寺遺跡 12.若江北遺跡 13.山賀遺跡 14.美園遺跡 15.高井田遺跡 16.宮ノ下遺跡
 17.弓削ノ庄遺跡 18.久宝寺遺跡 19.長原遺跡 20.池内遺跡 21.田井中遺跡 22.志紀遺跡

図4 縄文時代晩期から弥生時代前期の河内平野[井上 2007]

されたというか、あるいは強制的に形成したのかもしれないが、遠賀川系土器を使う集団が存在する。このように両集団が近接してほぼ同時期に併存するというパターンがわかっているため、それをふまえて、それまでの住み分け論ではなく、むしろ「共生論」みたいな形で、河内潟周辺の弥生開始期を語るができるようになったことを提唱する。秋山は結果的に住み分け状態になる原因にまで踏み込んで解釈したのである。

ここまでくるとヨーロッパ先史考古学でおこなわれている採集狩猟民と農耕民の接触モデルによる議論を、縄文から弥生への転換期においてもおこなうことが可能となってくる。なかでもフロンティア理論は、採集狩猟民と農耕民との積極的な交流を前提とする議論のため、採集狩猟民側の意志を前提とする共生論などとの関連がうまれてこよう。

I期新段階になると、長原遺跡のような縄文的な祭祀を行う集団はもはやみられなくなるとともに突帯文系甕も姿を消すことから、中西は彼らも弥生農耕民に転換して水田稲作に適したところに移動したと考え〔中西1992〕、弥生農耕民との間に起こった再編成によって、ほかの集団に吸収・統合されたと考えている〔藤尾2003a〕。

土器の分析をふまえて筆者は河内における弥生稲作への転換過程を次のように考えた〔藤尾2003a〕。中部瀬戸内における弥生稲作の開始に伴う変動が、東部瀬戸内・大阪湾沿岸地域圏に刺激伝播し、大阪湾沿岸の石器供給の変化や、生駒西麓産の長原式土器の広域流通を引き起こしたが、弥生農耕民の東方への移動をそれほど認めることはできなかった。そして河内の在来人を中心とする弥生農耕民が古河内潟沿岸や内陸部に集落を構え、弥生稲作を始めることで、この地の在地色の強い遠賀川系土器が創造された可能性が高い。

二 自生説（時期差説）

今のところ、I期前葉の遠賀川系土器と突帯文系土器との共伴を示す確実な証拠は水走遺跡一例のみである。伴う突帯文系土器の特徴はいわゆる長原式と同じではなく、外反する口縁のやや下位に突帯文を貼り付けるもので、サイズのことも長原式より小振りで、法量は遠賀川系甕に近いという〔若林2002〕。しかしこのような折衷土器がみられるのは水走遺跡だけで、大半の集団では突帯文土器が主体の遺跡自体がまれな存在であることから、長原式土器などの突帯文土器と遠賀川系土器は基本的に先後関係にあったと証拠とみている。したがって共生現象は局所的な現象、かつ短期間で解消されてしまうと説く。

明らかな共伴現象が一例しかなく、局所的な現象として短期間の共存までは否定しないものの、秋山のいうような長期にわたる共伴現象は、考古学的にいえる状況にないという立場である。

三 課題

包含層における多数の混在現象を同時に使われていた証拠と見なして、同時併存を想定する住み分け派と、厳密な意味で共伴現象と認められるものは一例だけとし、共存していたとしてもきわめて短期間と見なす自生説（時期差派の議論）は、良好な状態での共伴現象が遺構上で検出されないかぎり、これ以上、進みようがない。しかし後述するように、I期前葉の遺構がほとんど見つかっていない現状では、解釈の糸口を得られない状況である。

そこで本稿では炭素 14 年代測定を導入し、長原式と I 期古段階の遠賀川系土器の炭素 14 年代値を測定し、測定値を比較することによって、年代的に同時併存していたのかどうかを調べることにする。測定はすでに小林・春成・秋山によって行われているのでその値を用いる [小林・春成・秋山 2008]。

炭素 14 年代を測る前に、炭化物が付着しやすい甕形土器を中心とした土器編年を整備しておく必要があるため、本稿では小林・春成・秋山論文の根拠となっている秋山編年を利用することにする。

②……………共存期の確認—長原式新と I-1-古—

一 土器編年案

秋山編年によれば、従来の I 期古段階に相当する土器は、河内 I-1 期と I-2 期の二つに細分され、I 期中段階は河内 I-3 期、I 期新段階は河内 I-4 期として設定されている。

図 5 では長原式と河内 I-1 期が別枠で括ってあるので、時期差があるようにみえるが、論文では長原式が古（宮ノ下遺跡の 3 点と水走遺跡の 2 点）と、新（木の本と池島・福万寺の 2 点）に分かれ、長原式新と河内 I-1 期の古（若江北と水走の計 4 点）が、同じ時期に属すると考えられている。本稿で問題となるのも、河内 I-1 期の古とされている遠賀川系甕 4 点の時間的位置づけである。

この時期の遠賀川系甕はまだ定型化しておらず、筆者が標準甕とよんでいる土器が存在 [藤尾 2003 b] するにすぎない。これがまさに I-1 期古に相当すると考えられるからである。

まず長原式土器の細分である。1980 年代の長原遺跡の調査によって長原式土器が設定され、晩期最終末の突帯文土器と位置づけられたあと、1990 年代になって東大阪市水走遺跡が調査され、口縁部における突帯の貼り付け位置や胴部屈曲部の弱まった形状などを根拠に、長原式よりも新しい様相をもつ突帯文土器として水走式（図 7-1）が設定された経緯がある。水走遺跡で遠賀川系土器と伴った突帯文系土器とされているのはこの水走式である。

最近では水走式と遠賀川系土器の共伴自体を再検討する動きもあるようだが、本稿では小林・春成・秋山論文にしたがって、長原式を長原式古と長原式新に分け炭素 14 年代を測る。また最古式の遠賀川系甕の炭素 14 年代値も測り、両者の間で炭素 14 年代値の比較検討を行う。まず、長原式古と長原式新の型式学的特徴を説明する。

1 長原式古

① 東大阪市宮ノ下遺跡 1 次

図 5-OSH 6 口縁端部からわずかに下がった位置に突帯を貼り付け D 字刻目を施文する。胴部が湾曲する屈曲一条甕である。OSH 9 は口縁部がわずかに外反する屈曲型二条甕で、胴部中位で大きく湾曲する。D 字刻目を施文する。

② 東大阪市水走遺跡 8 次

OSH 31 口縁部破片なので器形は不明。口縁端部に接して突帯を貼り付け、D 字刻目を施文する。OSH 33 口径が小さいので、砲弾型一条甕の可能性はある。口縁端部から突帯幅一つ分

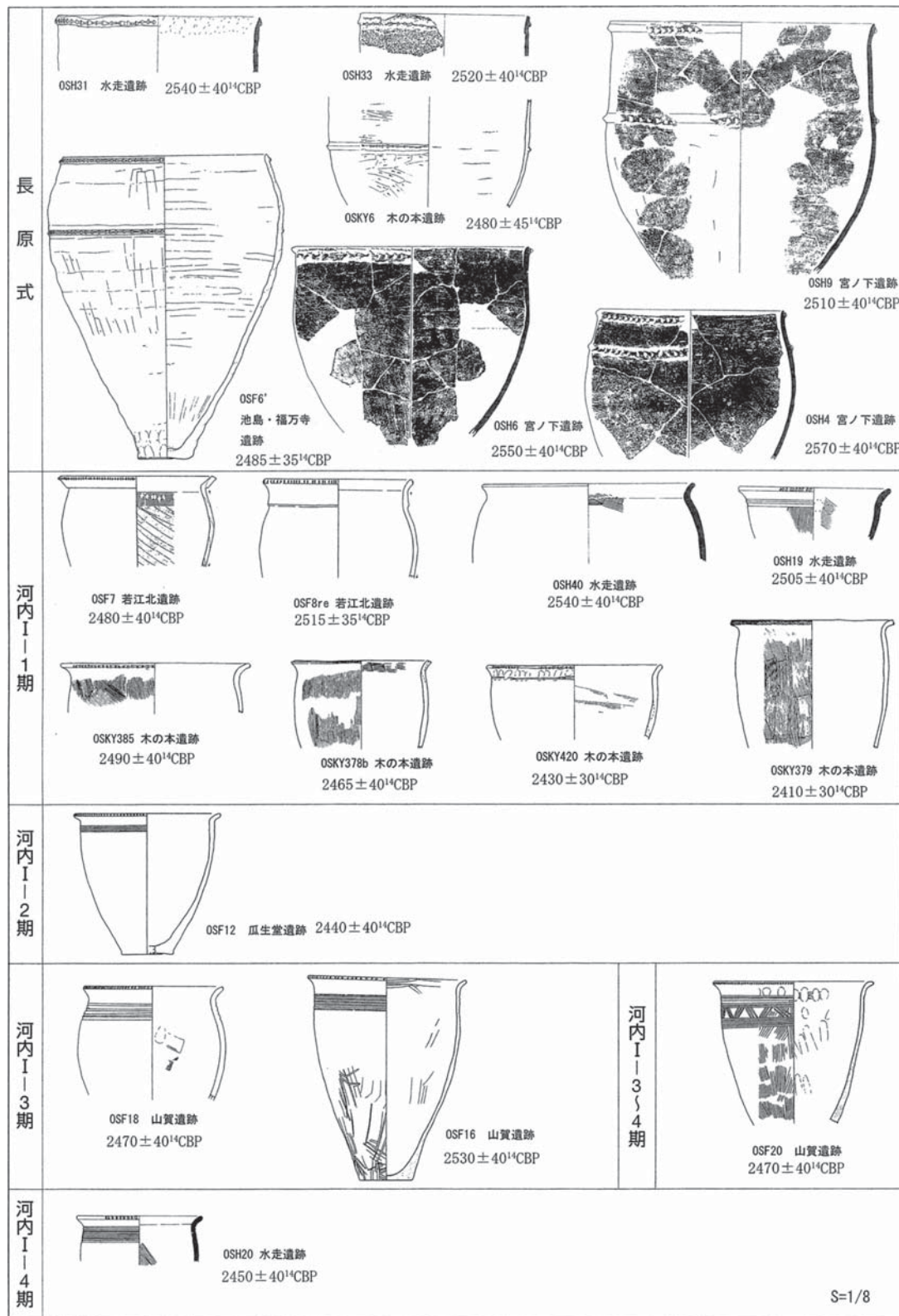


図5 炭素14年代測定をおこなった縄文晩期～弥生中期土器〔小林他2008〕
河内I-1期に位置づけられている水走遺跡出土OSH40と同19は、I期中段階の遠賀川系土器と同じ層から出土していることから、時期比定に問題がある。

ほど下がったところに突帯を貼り付ける。

2 長原式新

① 八尾市木の本遺跡

OSKY 6 I期の流路から多数の遠賀川系土器とともに出土したものである。屈曲型二条甕系で、口縁部が欠けているため、口縁部突帯の貼り付け位置は不明だが、胴部突帯には刻目が施文されないことや、胴部の湾曲がなくなっていることから長原式のなかでも新しい特徴をもっているといえよう。混在して出土した遠賀川系甕は河内I-1期に比定されているが、若江北遺跡や水走遺跡の遠賀川系甕より、時期的にも器形的にも新しく位置づけられている。

② 八尾市池島・福万寺遺跡

OSF 6'は同遺跡第14-2層上から出土したもので、屈曲型二条甕系である。胴部の屈曲はなくなり、口縁部が大きく内湾するもので、有明海沿岸の遺跡にみられる屈曲甕と同じ形態をもつ。器形的にはかなり新しい。

以上のように器形に湾曲を強く残し、口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付けて、D字刻目を施文する長原式古と、器形の湾曲が弱まり、小ぶりの刻目を突帯上に施文する長原式新という区分ができることがわかった。いまだ個体数が少ないため統計的に処理することはできないが、若江北・水走と、木の本のように、遺跡間で新古の差もみられるようなので、この基準にしたがって、長原式古・新の炭素14年代値について考えてみよう。

3 最古式の遠賀川系甕 (OSF 7, OSF 8 re)

若江北遺跡出土の2点は口縁部が外反するので一見、遠賀川系甕に見えるが、後で述べるように胴部上位に突帯文系甕に特徴的な湾曲部の痕跡を残していたり、口縁端部に貼り付け突帯状の特徴を残す、いわゆる口縁下端凸状甕であったり、また胴部が異様に張って口縁部に向かってすぼまる胴部形態であったりなど、I期古でありながらもI期中段階以降の甕に特徴的な胴張りの特徴を持っている。かつて筆者が標準甕とよんだものである〔藤尾2003b〕。

これらはすべて長原式新の突帯文系土器、いわゆる屈曲型一条甕の器形や特徴を引いているので、河内I-1期の遠賀川系甕が長原式新と共存していたことを示す考古学的な証拠と考えられるものである。遠賀川系甕は長原式新段階からみられるようになるので、長原式新はI期でもっとも古い突帯文系土器ということになり、長原式古は近畿最後の縄文文化の土器ということになる。

では標準甕の特徴を遺跡ごとに説明する。

二 近畿の標準甕

各地の標準甕をみてみよう。

1 神戸市大開遺跡 (図6)

二時期にわたって存続する環壕集落で長原式新の段階に形成される。大開遺跡には弥生化した突帯文系甕(播磨型:1, 2)と、標準型の遠賀川系甕(4~6)がある。突帯文系甕は口縁端部から突帯幅一つ分以上、下がったところに突帯を貼り付ける。下方向に強く垂れ下がる突帯に特徴があるもので播磨型と呼ばれている。さきほど設定した長原式新も将来的にI期突帯文系土器の河内型といった位置づけができるのかもしれない。

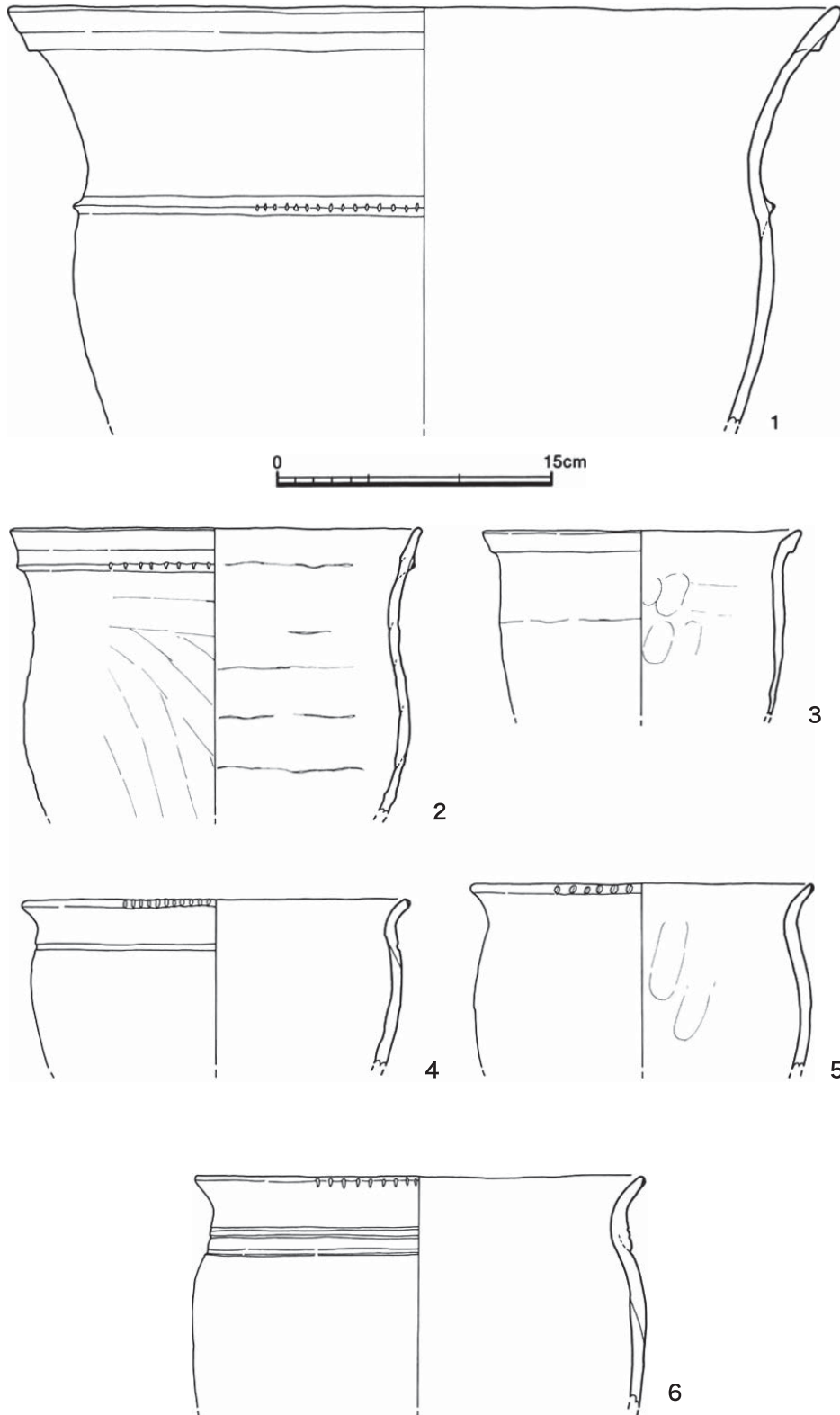


図6 神戸市大開遺跡出土長原式新併行の突帯文系甕と標準甕

標準甕は張った胴部、外傾接合による粘土帯積み上げによって口縁下の段を形作っている（4～6）。いずれも長原式古の屈曲型一条甕の技術伝統上にあるもので、新段階における環壕集落の形成と同時に標準甕の製作が始まったと考えている。

長原遺跡にはこうした標準甕製作の動きは見られない。

2 東大阪市水走遺跡（図7）

1が長原式に後続する突帯文系甕の水走式と考えられている土器である。少し外反させた口縁端部、胴部から頸部への傾斜変換点に貼り付けた胴部突帯、木口刻目に特徴がある。OSF 6（池島・福万寺）に比べると弥生化しているとはいえ、どちらかといえば長原式古に近いという印象をぬぐえない。2は口縁部突帯の上面が平坦化して、九州北部の亀ノ甲タイプのような形状をなす甕で、OSF 6と同様、完全に弥生化が終了している。一方、標準甕は、器形、口縁端部の作りと刻目の付け方、口縁下の段の作り方に、突帯文土器を母体に外反口縁甕へと転換していく過程をみることができる。大きく張る胴部から口縁部の付け根で大きく締め、外反する口縁部という形は、屈曲型突帯文甕の特徴である（4・5）。口縁端部の作りや刻目の付け方には、突帯文土器の刻目突帯文にみられる特徴を認めることができる。「口縁下端凸状甕のように口縁内面につけられた凹み状の窪みこそみられないものの、口縁部の面取りをおこなわないために凸状になった口縁端部の、下端の角を中心に刻目をつけるため、見た目は全面刻目ではなく下端刻目に見える点は、（中略）、口縁端部に接して突帯を貼り付け、突帯文に刻目を付けた突帯文甕と外見的によく似ている。」〔藤尾2003b：58〕。器面調整に遠賀川系甕の特徴である刷毛目が使われることは基本的にない。

それに対して木の本遺跡の標準甕に、胴部上位がすぼまる形をもつものはそれほどではなく、口縁下の胴部径が、胴部最大径とほぼ一致しており、I-2期の遠賀川系甕の基本的な胴部形態となっていく（図5-OSKY 378b, OSKY 379）。

以上のように水走遺跡でも、大開遺跡でみたように、突帯文甕自体の弥生化（2）と、標準甕（3～5）製作という二つの弥生化の動きをみることができた。

3 東大阪市若江北遺跡（図8）

屈曲型一条甕の系譜を引いたと考えられる標準甕だが、4を除いて胴部に屈曲の痕跡はみられない。丸みを帯びた器形をもつ胴部に外傾接合で粘土帯を一段積むことによって口縁部を形成する（1～3・5）。このため口縁部と胴部との境界が明確化して、遠賀川系甕の体裁を整えることができる。2のように内面に条痕調整を施した標準甕も存在する。

4は図5のOSF 7と同じ土器である。実見したところ、胴部上位に屈曲の痕跡を残し、口縁部をくの字状に大きく外反させ、外側に粘土を貼り付けて段を整形させている。2はOSF 8reと同じ土器である。一見別個体のように見えるが、口縁下のもっともすぼまった部分を少し肥厚させて接合に伴う段を作るところからみても間違いはない。

このように外傾接合で粘土帯を積み上げ、内面を条痕調整し、口縁端部形態や刻目に突帯文土器との共通性を見せる外反口縁甕が存在することをどのように理解すればいいのだろうか。やがてI-3期になると、胴部が張らない器形になり、口縁部も胴部から明瞭に外反している。典型的な遠賀川系甕としてふさわしいものになる。

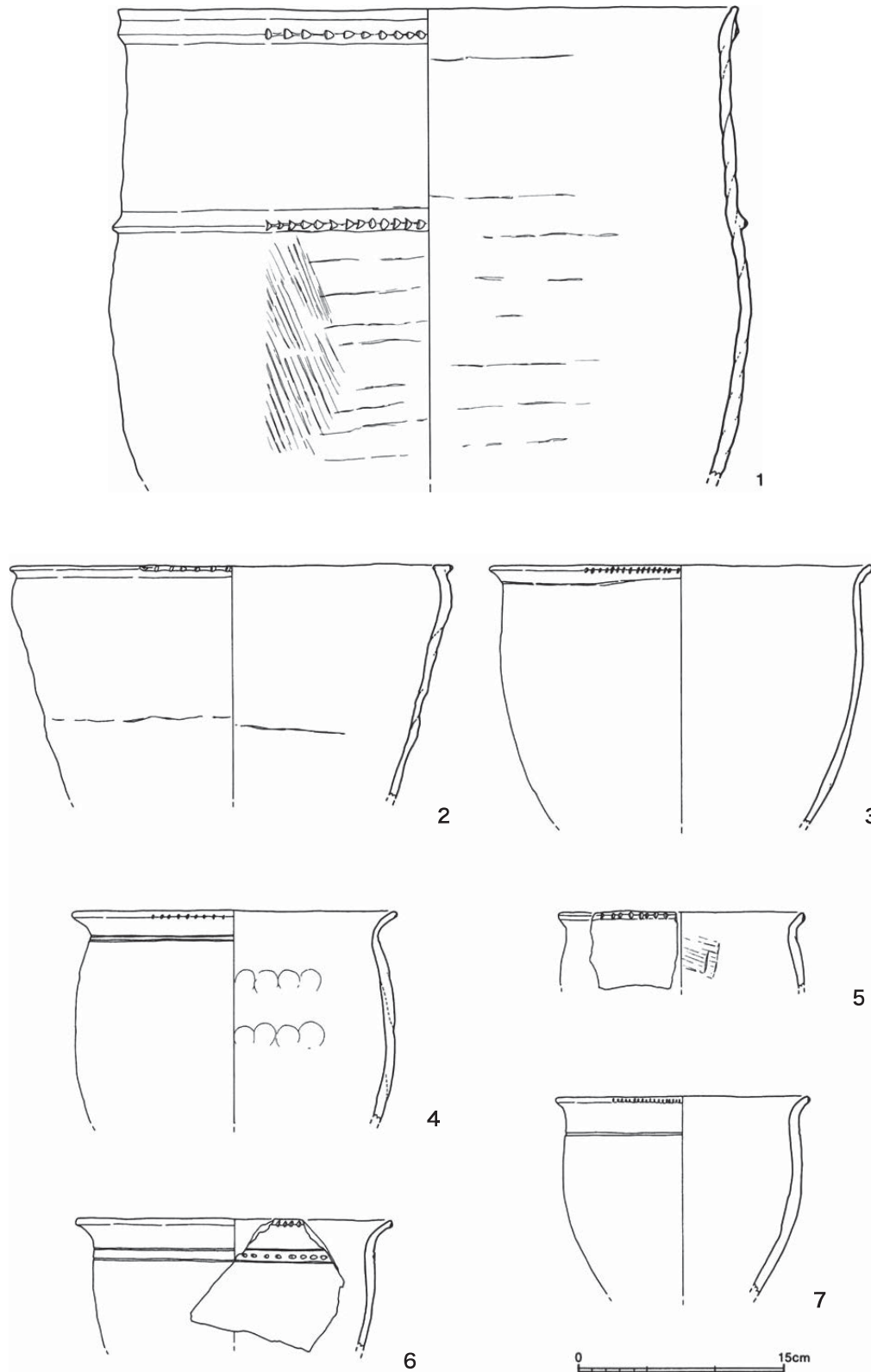


図7 東大阪市水走遺跡出土の突帯文系甕と遠賀川系甕

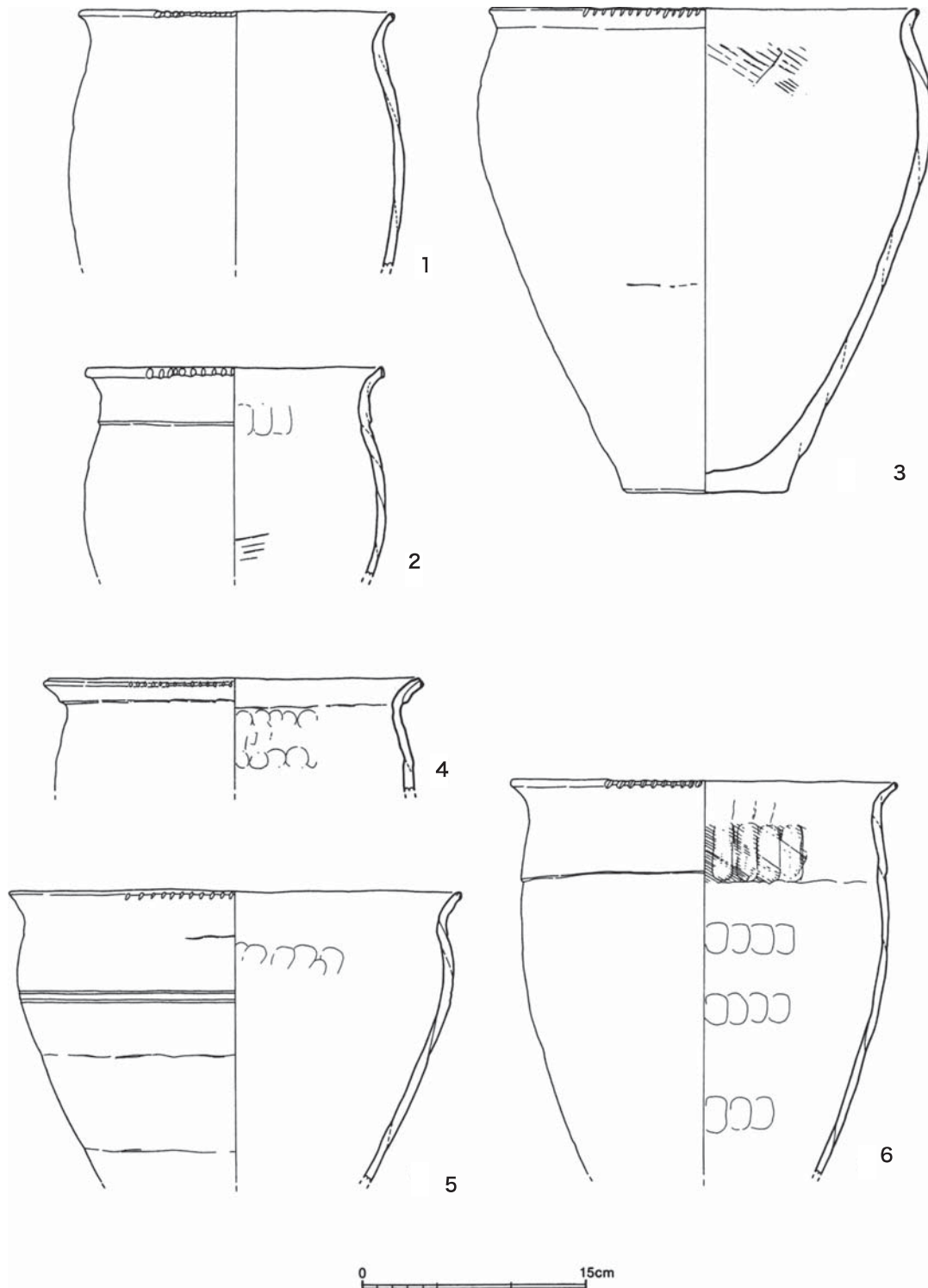


図8 東大阪市若江北遺跡出土の標準甕

4 奈良県田原本町唐古・鍵遺跡（図9）

1は本遺跡最古の突帯文系甕である。長原式古に後出する長原式新段階の土器で、遠賀川系甕と混在して出土した。口縁部だけに突帯を貼り付けるがすでに刻目は施さない。外面はナデ調整だが刷毛目は用いない。突帯文系甕の最終形態である。2は、屈曲一条甕系の標準甕で、半全円の刻目に、ケズリ出し状の段を口縁下にもっている。屈曲一条甕を作る過程で積み上げた粘土帯の接合の結果、段が生じたものである。3～6になると完全に弥生化しており、I期中段階の典型的といえる遠賀川系甕といえる。5はいわゆる瀬戸内甕でヘラ描き沈線を少条もつ。すでに刷毛目調整が突帯文系甕にも導入されていることから弥生化していることがわかる。4・6は標準甕から脱却して定型化した遠賀川系甕で、少条のヘラ描き沈線をもつ。これらの土器はSR 201という流路から出土したもので、1が最下層、2が7層、図示はしていないがケズリ出し突帯をもつ遠賀川系甕が6層から出土しており、層位的には上下関係にある。

このように唐古・鍵遺跡では、水走遺跡と同様に突帯文系土器として弥生化していく動き（1・5）と、標準甕から遠賀川系甕へと弥生化していく（2～4・6）、二つの弥生甕創造の動きを指摘できる。

5 まとめ

以上のように、兵庫・大阪・奈良の初期弥生遺跡の中には、弥生甕を創造する二つの動きがあり、長原式を使い続けた人だけや、または遠賀川系土器を使う人だけでこれらを作ることはできない。人びとの出自別の比率はわからないが、両方の技術を持つ人びとがいなければできない弥生甕創造の動きである。このことから考古学的に突帯文系甕と標準甕が同時に存在していたことは明らかだと考えられる。それでは実際に、長原式新と遠賀川系土器I期古の炭素14年代値を比較してみよう。

③……………炭素14年代の導入

一 炭素14年代値

小林・春成・秋山論文から、当該期の炭素14年代値（表1）を拾ってみる。図10は長原式古、長原式新、遠賀川系甕の炭素14年代値を実測図とともに表示したものである。手続きとしては、それぞれの炭素14年代値の中心値をIntCal 04上にプロットすれば、各型式の存続幅が出るわけだが、ことはそう簡単ではない。どれも2500¹⁴C BPから2400¹⁴C BPが中心で、ほとんど新旧の差がみられないことがわかる。つまり近畿の弥生I期が基本的に炭素14年代の2400年間問題にかかっていることを意味する。この時期、紀元前700年頃から紀元前400年頃まで、較正曲線は2400¹⁴C BPから2500¹⁴C BPの間に横たわっている。すなわち、前期末を除く、すべての前期の土器型式がこの範囲に入ってしまうため、型式ごとの炭素14年代値を絞り込むことがきわめて難しいのである。

ここで用いるのが、土器型式の順番を利用する方法である。土器型式は変化の順番を規定したものである。時期が異なるかどうかを調べるためにはまた別の操作が必要だが、変化の順番だけなら炭素14年代値の特定にこれを活用できる。土器型式を用いたウィグルマッチ法と呼ばれる方法で

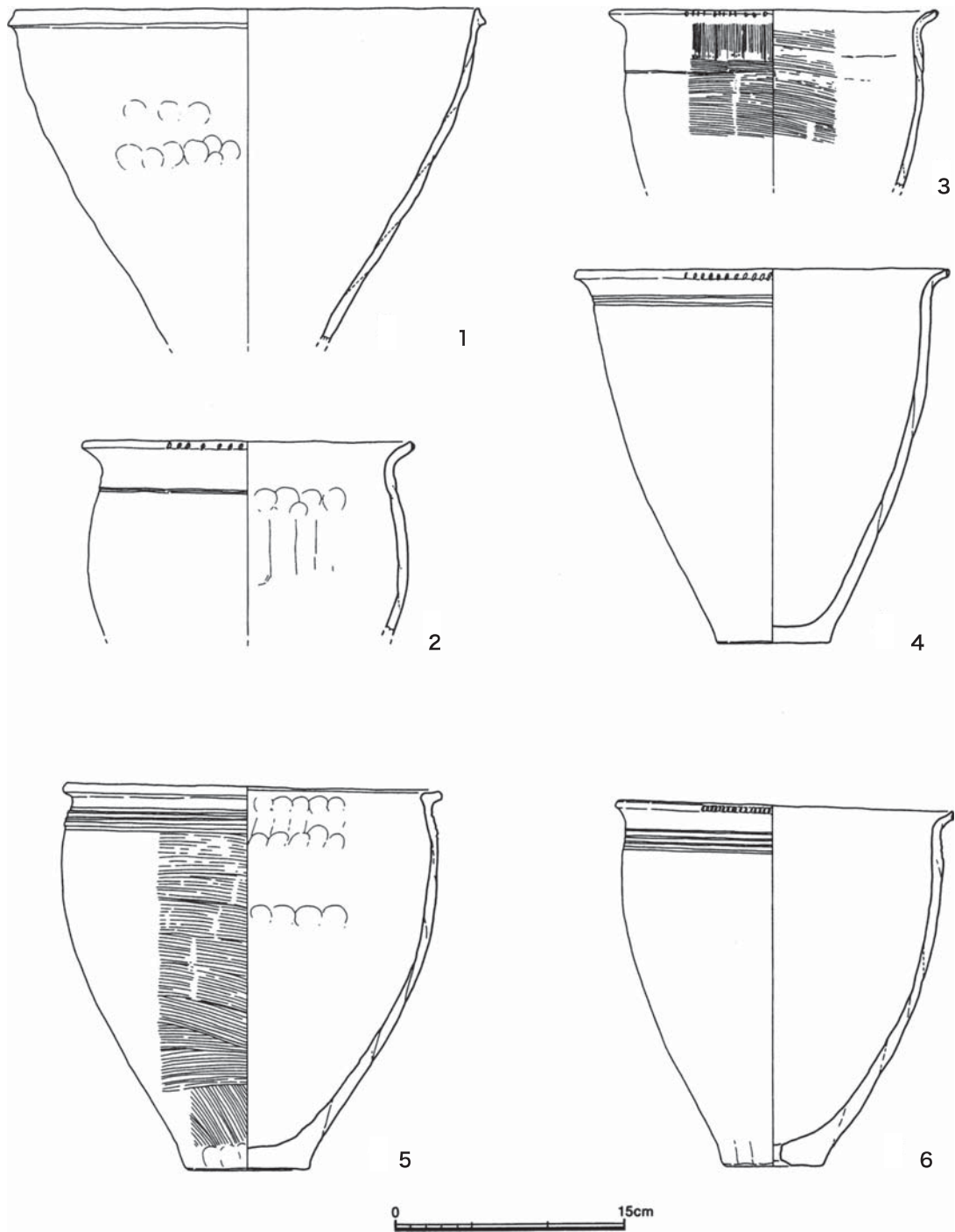


図9 奈良県唐古・鍵遺跡出土の突帯文系甕と標準甕

表1 近畿地方の縄文晩期～弥生中期初めの実年代[小林ほか 2008]

遺跡	試料番号	土器型式	炭素14年代(BP)	暦年較正年代(確率)	備考
伊丹市口酒井	HYIT 01	口酒井・船橋式	2530 ± 30	795～540 cal BC (95.4%)	列1
伊丹市口酒井	HYIT 02 b	口酒井	2580 ± 40	820～545 cal BC (95.4%)	
伊丹市口酒井	HYIT 04	口酒井・船橋式	2610 ± 40	845～750 cal BC (85.8%)	
茨木市牟礼	OSBR 1	口酒井式	2595 ± 35	830～750 cal BC (84.2%)	
茨木市牟礼	OSBR 3	突帯文	2555 ± 35	800～545 cal BC (95.4%)	
茨木市牟礼	OSBR 2	I	2495 ± 35	785～505 cal BC (92.8%)	
高槻市安満	OSTK 2	I 期中段階	2440 ± 40	750～405 cal BC (95.4%)	漆
尼崎市東武庫	HYMU 24 a	I 期新段階	2540 ± 30	795～545 cal BC (95.4%)	
神戸市本山	HYKB 03 a	突帯文	2510 ± 40	795～510 cal BC (94.1%)	
神戸市本山	HYKB 03 b	突帯文	2505 ± 40	790～505 cal BC (93.1%)	
神戸市本山	HYKB 07	長原式	2495 ± 40	780～505 cal BC (95.4%)	
神戸市本山	HYKB 10	長原式	2490 ± 40	780～495 cal BC (89.1%)	
神戸市本山	HYKB 05 b	I・古	2505 ± 40	790～510 cal BC (92.8%)	
神戸市本山	HYKB 06 a	I・古	2540 ± 40	800～540 cal BC (95.5%)	
神戸市本山	HYKB 06 b	I・古	2480 ± 40	770～480 cal BC (95.5%)	
神戸市本山	HYKB 15	I・古	2470 ± 40	765～410 cal BC (95.4%)	
神戸市戎町	HYKB 31 b	I・新	2395 ± 40	745～390 cal BC (95.5%)	
神戸市玉津田中	HYMU 3	突帯文	2500 ± 30	780～515 cal BC (95.4%)	
神戸市玉津田中	HYMU 12 b	II	2240 ± 60	400～165 cal BC (95.4%)	
東大阪市宮ノ下	OSH 4	長原式	2570 ± 40	810～545 cal BC (95.5%)	
東大阪市宮ノ下	OSH 05	船橋式	2620 ± 40	850～755 cal BC (88.3%)	
東大阪市宮ノ下	OSH 06	長原式	2550 ± 40	845～540 cal BC (95.5%)	
東大阪市宮ノ下	OSH 09	長原式	2510 ± 40	795～510 cal BC (94.1%)	
東大阪市宮ノ下	OSH 13	I	2425 ± 35	750～400 cal BC (95.3%)	
東大阪市鬼塚	OSH 15	滋賀里II～III	2940 ± 40	1270～1015 cal BC (94.5%)	
東大阪市水走	OSH 31	長原式	2540 ± 40	800～540 cal BC (95.5%)	
東大阪市水走	OSH 33	長原式	2520 ± 40	795～515 cal BC (95.4%)	
東大阪市水走	OSH 40	I・中	2540 ± 40	800～540 cal BC (95.4%)	
東大阪市水走	OSH 19	I・中	2505 ± 40	790～505 cal BC (95.5%)	
東大阪市水走	OSH 20	I・新	2540 ± 40	755～405 cal BC (95.4%)	
東大阪市瓜生堂	OSF 12	I・中～新	2440 ± 40	760～400 cal BC (84.9%)	
東大阪市若江北	OSF 8	I・古	2515 ± 35	795～535 cal BC (91.7%)	
東大阪市若江北	OSF 7	I・古	2480 ± 40	775～480 cal BC (85.1%)	
八尾市・東大阪市池島・福万寺	OSF 6	長原式新	2485 ± 35	780～500 cal BC (86.0%)	
八尾市木の本	OSKY 6	長原式	2480 ± 45	770～480 cal BC (86.0%)	
八尾市木の本	OSKY 26	I・古	2490 ± 40	780～495 cal BC (89.1%)	
八尾市木の本	OSKY 378 b	I・古	2465 ± 40	760～410 cal BC (95.4%)	
八尾市木の本	OSKY 420	I・古	2430 ± 40	750～400 cal BC (95.4%)	
八尾市木の本	OSKY 379	I・古	2410 ± 30	740～400 cal BC (95.5%)	
東大阪市山賀	OSF 16	I・中～新	2530 ± 40	795～535 cal BC (91.7%)	
東大阪市山賀	OSF 20 b	I・中～新	2470 ± 40	760～475 cal BC (80.8%)	
東大阪市山賀	OSF 18	I・中～新	2470 ± 40	760～475 cal BC (80.8%)	
八尾市美園	OSF 23	I・新～II・古	2270 ± 30	395～225 cal BC (88.7%)	
田原本町唐古・鍵	NRTK 1	長原式新	2460 ± 40	760～470 cal BC (62.3%)	ベータ
田原本町唐古・鍵	NRTK 1	長原式新	2495 ± 35	780～510 cal BC (90.5%)	東大
田原本町唐古・鍵	NRTK 3	I・古	2340 ± 29	410～360 cal BC (81.4%)	
田原本町唐古・鍵	NRTK 5	I・中～新	2470 ± 30	760～480 cal BC (83.3%)	
田原本町唐古・鍵	NRTK 41	I	2434 ± 30	760～400 cal BC (95.4%)	
田原本町唐古・鍵	NRTK 44	I・中	2468 ± 30	760～480 cal BC (81.9%)	
田原本町唐古・鍵	NRTK 47	I・中～新	2491 ± 29	785～515 cal BC (90.5%)	
田原本町唐古・鍵	NRTK 47	I・中～新	2490 ± 50	785～480 cal BC (85.8%)	米, ベータ
田原本町唐古・鍵	NRTK 47	I・中～新	2445 ± 30	760～400 cal BC (79.1%)	米, 東大
田原本町唐古・鍵	NRTK 48	I・新	2432 ± 29	755～400 cal BC (79.1%)	
田原本町唐古・鍵	NRTK 49	I・新	2336 ± 29	410～360 cal BC (84.2%)	
田原本町唐古・鍵	NRTK 8	II	2245 ± 35	390～200 cal BC (94.7%)	
田原本町唐古・鍵	NRTK 6	II	2260 ± 40	395～200 cal BC (94.8%)	ベータ
田原本町唐古・鍵	NRTK 6	II	2240 ± 30	390～200 cal BC (94.8%)	東大

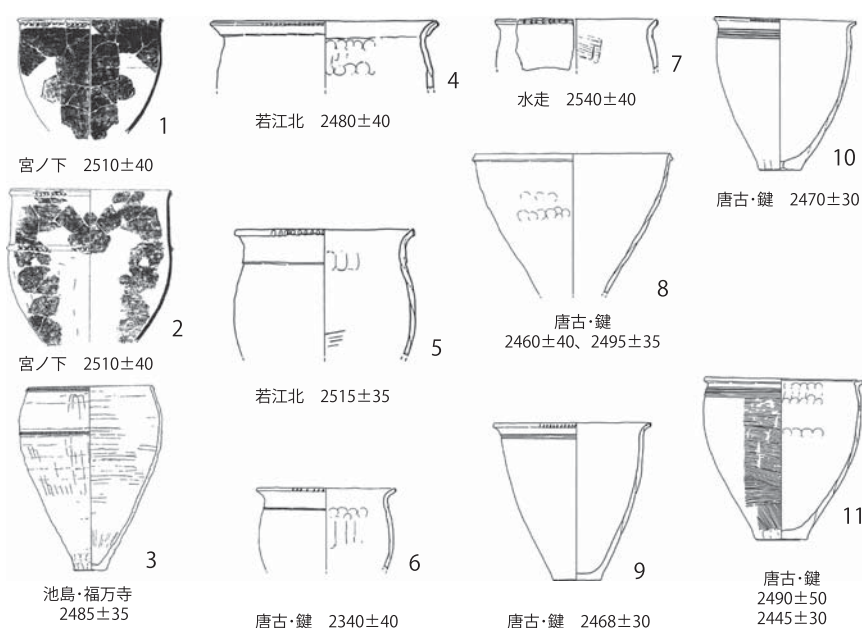


図 10 炭素 14 年代測定をおこなった突帯文, 突帯文系甕, 標準甕, 遠賀川系甕

1, 2 長原式古, 3, 8 長原式新, 4~6 I 期古, 7, 9~11 I 期中

ある。詳細は筆者の論文〔藤尾 2007〕を読んでいただくことにして、ここでは具体的な操作法について説明する。ウィグルとは凸凹のことで、もともとは年輪年代を測ることができない樹種の炭素 14 年代を測って較正暦年代を確率的に求めるための方法で、それを土器に準用したものである。

まず、2400 年問題の直前と直後にくることが確実な土器型式を押さえる。近畿の場合は、口酒井・船橋式が直前に、I 期新段階が直後にくることがわかっている。すると長原式古から I 期中段階までの土器型式が 2400 年問題の中に入ってくるのがわかる。

つまり図に示した土器はすべてが 2400 年問題のなかに収まってしまうのである。あとはこれを順番に並べていけばいいのだが、間隔つまり存続幅はわからないので、正確な位置に落とすことはできない。かろうじて長原式古が 2400 年問題の左寄り、I 期中段階が右寄り、長原式新と I 期古段階が真ん中付近だろうといえるぐらいである。三つの土器型式が約 300 年の間に収まることになるが、三つの土器型式の存続幅が同じである保証もないので、やはり正確にプロットすることは難しい。だが手がかりはあるので、それをご紹介します。

まず長原式古だが、OSH 06 : 2550 ¹⁴C BP, OSH 09 : 2510 ¹⁴C BP など、2500 ¹⁴C BP 台後半を示す値を、較正曲線の 2400 年問題の左寄りの部分で探すと (図 11)、だいたい紀元前 700 年から紀元前 600 年付近に存在することがわかる。とくに 2550 ¹⁴C BP は紀元前 8 世紀を除くとこの期間にしかみられない。逆に 2500 ¹⁴C BP は I 期古段階にはみられるが、中段階にはみられないので、2500 ¹⁴C BP 後半は 2400 年問題の左寄りの部分に集まってくると考えてよいだろう。

次に長原式新だが、炭素 14 年代値で見ると 2495 ¹⁴C BP, 2485 ¹⁴C BP, 2460 ¹⁴C BP 前後にある。較正暦年代は紀元前 700 年～紀元前 6 世紀中頃以前にもっとも集中している。

I 期古に比定された遠賀川系甕の炭素 14 年代値は、2540～2480 ¹⁴C BP で、2500 ¹⁴C BP を挟んで

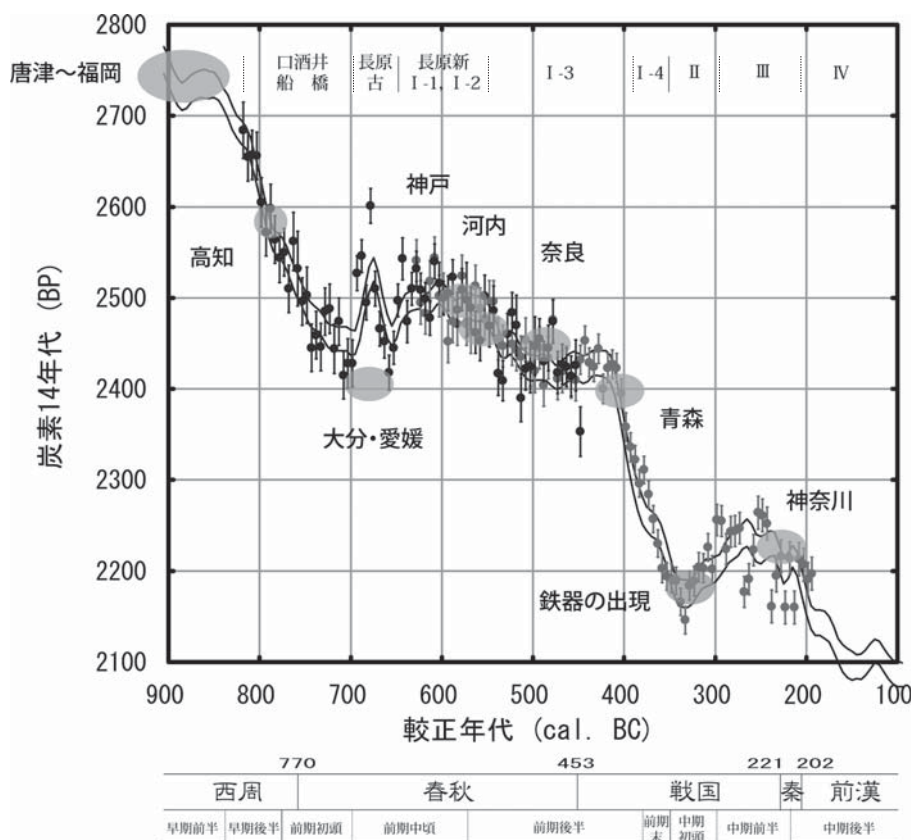


図11 日本列島における水田稲作の開始時期を較正曲線上にプロットしたもの

前後30年ぐらいに集中していることがわかる。このことから長原式新とⅠ期古の遠賀川系甕がほぼ同じ炭素14年代値をもつことがわかるのである。較正暦年代では同じく紀元前6世紀前半付近に分布の中心をおくものと考えられる⁽²⁾。

Ⅰ期中段階になると、2400¹⁴C BP前半付近の値を示し始めるため、較正暦年代では紀元前550年頃以降と推測できる。

以上のように、2400年問題に相当する長原式古、長原式新とⅠ期古、Ⅰ期中は、それぞれ、紀元前7世紀、紀元前6世紀前半、紀元前550年前後に中心値をもつ土器型式という指摘ができる。これが土器型式を用いたウィグルマッチ法の実践例である。土器型式ごとの存続幅を統計的に求めることはできないけれども、きわめておおざっぱだが、長原式古は約50年、長原式新とⅠ期古段階は約100年、Ⅰ期中段階は150年ぐらい続いたと考えることができる。

したがって、長原式新とⅠ期古の遠賀川系甕は3世代から5世代ぐらいは共存していたことになり、これまでの常識を大幅に上回って、長期間、併存していたと推測される。

この年代をもとに近畿に水田稲作が入ってくる時期の有様を地域ごとにみてみようと思う。

二 近畿各地における水田稲作の開始

水田稲作は紀元前7世紀後半の神戸、本山遺跡に始まる。本山遺跡から出土した長原式新やⅠ期

古段階の甕の炭素 14 年代は 2500 ¹⁴C BP 台半ばから後半を示し、近畿ではもっとも古い段階に位置づけられる。古河内潟沿岸に到達するのは紀元前 6 世紀に入ってからである。若江北遺跡や水走遺跡の I 古甕の炭素 14 年代が 2500 ¹⁴C BP を挟んだ前後 30 年に集中するからである。神戸地域とは約 50 年の開きが認められる。

奈良盆地に入るのは、紀元前 550 年前後でさらに遅れる。唐古・鍵遺跡第 66 次調査の流路最下層から出土した長原式新の炭素 14 年代値は 2400 ¹⁴C BP 台に入っているところからも推測できる。

④……………近畿における弥生稲作開始期の特質

Ⅲ章までの論考によって、長原式新の土器と、I 期古（河内 I-1）の遠賀川系甕を使用する人びとが同時に存在し、相互に交流していたこと。その期間は実に 100 年から 150 年にも及んでいたと推定してきた。九州北部玄界灘沿岸地域で水田稲作が始まってから 300 年以上経過したあと、古河内潟沿いの村々では 150 年近くも、二つの系譜の異なる土器を使い続けた。このことをどのように解釈すればいいのであろうか。本章では北西ヨーロッパ先史時代のモデルであるフロンティア理論を用いて考えてみたい。

一 フロンティア理論とは

北西ヨーロッパの中石器時代には一部農耕をおこなっていた集団は存在したものの、基本的に採集・狩猟社会であった。家畜を伴う小麦農耕がすぐそばまで迫っていても、数百年にわたって農耕を受け入れず、採集・狩猟文化を継続したエレ・テボレ文化は有名である。

そうした採集狩猟民がいる地域空間に農耕民が入ってきたときに、すぐに両者の接触が起こる場合を重視するモデルで、その際、採集狩猟民の一部がフロンティアとなって両者を結びつけ、その結果、地域全体に農業が拡大していくと考えるパターンを想定した（図 12）。

R.W デンネルは、農耕を含むあらゆる生業をおこなう採集狩猟民（Native）がいた地域に農耕民（New Comer）が入ってきた場合を想定していて、採集狩猟民は無理なく農耕民になるだけの技術的水準に到達していたという前提条件を設けた。

フロンティアの役割ごとに 8 つのカテゴリーに分けている [Dennel 1985]。

このうち、農耕民、本稿の場合は水田稲作民が、在来民、本稿の場合は地元の長原式新土器を使い縄文的な農耕（園耕）をおこなっている人びとの地理的に空間に入ってきた場合、ただちに何らかの反応を示す採集狩猟民を機動的フロンティア、何の関心も示さない採集狩猟民を静的フロンティアという。

機動的フロンティアの中には、農耕民の村の中に採集狩猟民が移住し農業が拡大していく浸透型と、農耕民が採集狩猟民とは競合しない空白地域に植民し、農業を行う不浸透型に分かれる。静的フロンティアは本稿との関係はうすいと考えられるので説明を省略する。またコロニーを作る不浸透型は想定できないので今回はふれない。

機動的フロンティア浸透型とは、「2～3 のコミュニティからなる小さな農耕集団が、採集狩猟民の地理的空間に入植することからすべてが始まる。農耕民は家畜や穀物などの新しい食料、土器、

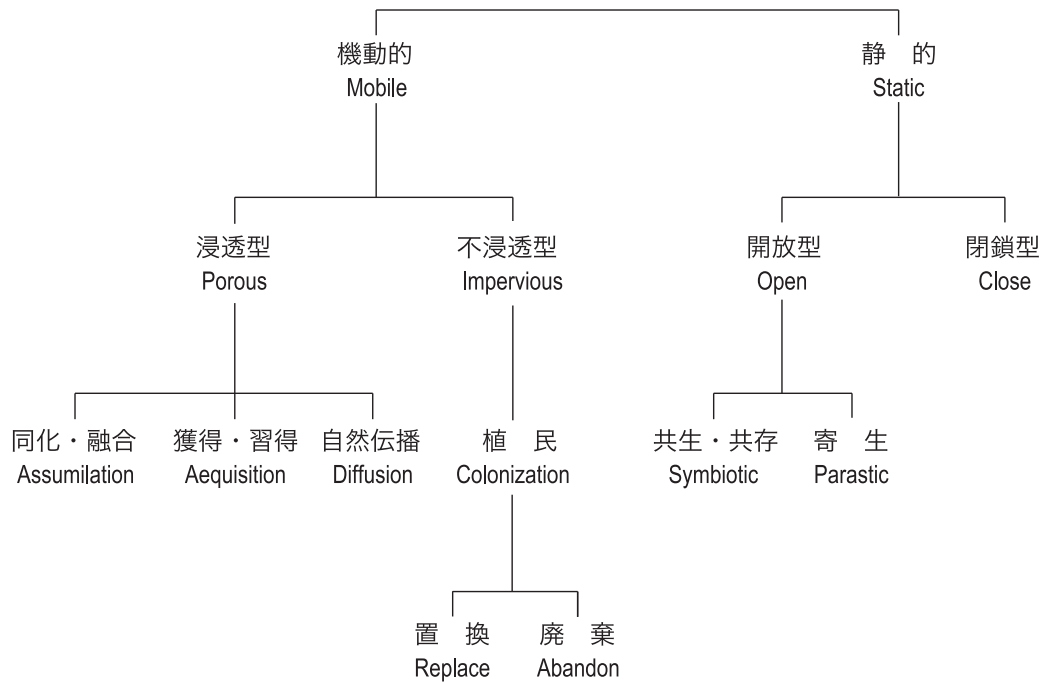


図12 フロンティア模式図[Dannel 1985]

磨製石器などの新しい道具や技術を持っている。農耕民はそれらを駆使して、採集狩猟民がもつテリトリーより小さなテリトリーを開拓し、少人数ながら集約的に労働力を投下して農業をおこなう。コロニーを作るのである。「採集狩猟民は農耕民のこのような動きに対して関心をもって観察している。農耕民のもつ新しい文物や技術に魅せられてであろうか。やがて採集狩猟民のなかの未成年や女性など好奇心あふれる世代の勇気あふれる行動を通じて、採集狩猟民と農耕民との間に人的接触がはじまる。この段階では、採集狩猟民・農耕民とも交流することの長所を自覚していることが重要である。採集狩猟民も農耕民もお互い同士の緊張状態や争いを極力避け、有効な関係を保とうとする。なぜなら農耕民にとって採集狩猟民は、地理空間内の地理や資源に関する情報を多くもち、毛皮や獣皮、獣肉や石材・木材などの天然資源を交換する相手だからである。さらに農耕民にとって採集狩猟民は、労働力や配偶者の供給源という役割も担っていた点が重要である。」[藤尾 2003 a : 213-214]。

こうした初期段階をへて、採集狩猟民は次第に農耕民化していくが、その方法には三つある。採集狩猟民の一部が農耕民のなかにとりこまれて同化・融合し、農耕民化していく方法 (Assumilation)、採集狩猟民が主体的に見よう見まねで獲得・習得しながら農耕民化していく方法 (Aequisation)、最後が直接的な人的交流がなく、物資や情報だけが拡大していくものである (Diffusion)。

二 大阪平野に当てはまるのは

以上、紹介したフロンティアモデルは、大阪平野のケースとどのような関わりをもつのであろうか。フロンティアモデルの要点は三つある。まず、農耕民と接触する以前の採集狩猟民の生業に農耕が含まれているかどうか、次に農耕民と接触して採集狩猟民が農業を始めるまでの対応、そして

最後が農耕を始めたあとの採集狩猟民の動向である。この三つのあり方によってモデルが決まるのがフロンティアモデルである。したがって大阪平野を舞台に考える場合もこの三点に留意しながら考えてみたい。

1 長原式古以前の生業

コメは口酒井式の段階に伝わっていたことが靱痕土器の存在からわかる。しかもこの時期、夜臼系の壺の出現、砲弾型一条甕の出現、深鉢底部の平底化など、九州西部の夜臼Ⅱ式にともなう水田稲作文化の情報を断片的に認めることができる。口酒井式には石庖丁も伴っているの、稲作が存在していたとしてもおかしくはない状況を見せる。水田稲作とまでいわないにしても、昨今の研究状況をみれば、縄文晩期、少なくとも九州北部以外の突帯文土器単純段階に農耕がおこなわれていた可能性は否定できない。したがって、農耕民が入ってくる以前に、採集狩猟民が農耕を知っていた、もしくはおこなっていたと考えることは可能である。水田稲作民と出会う以前に、経験を積んでいたことになる。

2 農耕民が入ってきてから採集狩猟民が水稻農耕を始めるまでの対応

長原式新段階になると、基本的に突帯文系土器だけを出土する遺跡は見つかってなく、知られているのは両方の土器が混在して見つかる遺跡ばかりである。しかも両系統の土器の間には技法の共通性がみられることから、この段階の約100年間は内容はともあれ、水田稲作をおこなっているようである。ただし一斉に始めたかどうか、少しずつ増えていったのかどうかは、現状では調べようがない。炭素14年代でわかるのは、あくまでも100～150年間の累積の結果でしかない。

3 農耕を始めたあとの採集狩猟民の動向

少なくともI-4期（I期末）の紀元前4世紀前半には採集狩猟民単独の村が存在したことを示す遺跡や遺物はみられない。I-3期（I期中段階）の紀元前6世紀には、ケズリ出し突帯をもつ遠賀川系甕をもつ集団もあらわれるので、この時期から採集狩猟民系の存在が希薄化し始める。また後述するように灌漑施設をもつ定型化した水田もこの時期からみられるようになるので、水稻農耕民に系譜が求められる文化的要素だけが目立つようになる。

こうした背景には次のような解釈が役に立つ。採集狩猟民が農業という生産手段を採用すること、これは、農耕民と同じ土俵の上に立って競争関係にはいることを意味する。この時点で水や土地は戦略的な対象となり、やがては水や土地の確保が人口増に伴う新たな可耕地の獲得の上で争いの主要な要因となってくる。そしてこの競争は最終的に経験が豊富で技術に長けた農耕民に有利な展開となり、やがては農耕民に吸収・統合されていく [Zvelevil & Rowley-Conwy 1984]。

大阪平野の事例にもっとも近いのは、はいつてきた農耕民の数が採集狩猟民より少なく、はいつてきてすぐに交流がはじまる点で共通する機動的フロンティア浸透型同化・融合パターンであったが、農耕民ははいつてきた当初にコロニーをつくる点など、未確認の部分をまだ含んでいる。含んではいるものの、このモデルを参考に大阪平野に当てはまる集団関係論について考えてみたい。

三 100年間の意味

突帯文系甕（長原式新）と遠賀川系甕（I-1古）が共存する約100年間の状況を具体的にものがたる考古学的事実はあるだろうか。

水田構造と集落構造から大阪平野の初期弥生文化の様相を復元することができる。I期古段階の竪穴住居が見つからない大阪平野で、定型化した住居が見つかるようになるのは中段階からなので、I期古段階の大阪平野では遊動的な生活が送られていたと考えられている〔若林 2000〕。

若林邦彦によると、長原式古（若林は長原式期と表現）段階は、縄文後期以来の居住システムが継続中で、沖積地・扇状

地・段丘・丘陵へと短期間で居を移す季節性の移動がおこなわれていたと考える。しかしI期前葉（本稿の長原式新・I-1-古併行期）になると、水田経営に傾斜していったことを示すかのように三角州堆積領域に遺跡が作られる比率が高まるといふ。これこそ居住域が近距離移動する状況を示す証拠だが、環壕の存在などから季節性の移動は否定されている。若林は可耕地を求めて居住域や生産域を細かく移動させていった結果とみる。

I期後半（中段階）になると、山賀遺跡や亀井遺跡のように核となる集落・居住域が形成されはじめ、固定型集落が出現。周囲の移動型居住域とあわせて、小地域社会が形成されるとみる。

このような集落動態と連動してくるのが水田経営の実態やサヌカイト製石器・石材の変化である。I期前葉には最適地を求めた小規模な水田域が分節的に形成されていたが、中段階になると、山賀遺跡や志紀遺跡など、大規模水路を用いる灌漑システムをもつ水田が存在している（図13）。

I期古段階の石器には大陸系磨製石器が少なく、サヌカイト製の刃器類が目立つが、後半になると大陸系磨製石器が増加し始める。水田経営の本格化に伴って、大量の杭や矢板の製作に使用された結果と考えられる。このような石器組成の変化に連動するように、I期古段階にみられた金山産サヌカイトの高比率状態も終息に向かい、後半（様相3）には地元の二上山産サヌカイトが盛り返してくる。

このような考古学的事実を先のフロンティア理論と関連づけると以下のようなになる。規模や数は不明だが、水田稲作民が古河内潟周辺にやってくる。彼らは在来の突帯文土器を使う人びと、具体的には長原式新を使う人びとと無関係に根付くのではなく、在来のフロンティアを介して、ともに水田稲作を営み始める。

しかしそのあり方は福岡平野の板付遺跡や野多目遺跡のように、大区画水田を造成する訳でも、環壕集落を造るわけでもなかった。わずかな人数で小さな面積の水田を耕し、流動的な生活を送ることであった（図14）。土器は突帯文土器（長原式古）が弥生化した突帯文系甕（長原式新）と、屈曲型一条甕を母体に口縁部を外反させ、遠賀川系甕に近づけて作られた標準甕である。もちろん、

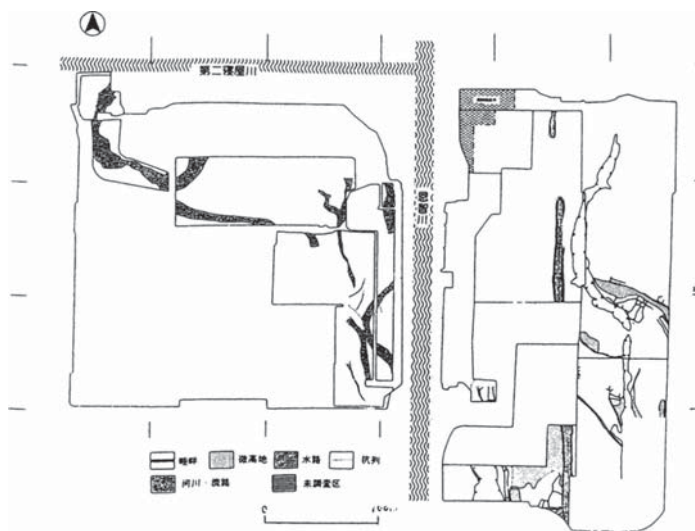


図13 池島・福万寺遺跡の弥生I期水田

長原遺跡のように前者しか作らなかった在来民の母村的な集団も存在した。

このような状態が100年ほど続くなかで、少しずつ長原式新を使う人びとと水稲農耕民との間の同化・融合が進んでいく。大量の農耕民の移住を認められない限り人数的には少数者の文化に大多数の在来民が長い時間をかけて同化・融合し弥生農耕民化していくのである(図15)。土器もケズリ出し突帯をもつ定型化した遠賀川系甕が成立し、のちの弥生中期土器の母体となっていく(図16)。

おわりに

水田稲作が始まったばかりの近畿を語る上でさけては通れないのが、長原式土器と遠賀川系土器との関係である。本稿では折衷土器と炭素14年代値を根拠に長原式新と最古式の遠賀川系土器が同時に存在したと認め、そこから何が言えるのか、大阪平野における弥生開始期の特徴について述べてきた。異なる文化を背景とする人びとが、100年の長きにわたり併存した状況を、フロンティア理論の機動的フロンティア浸透型同化・融合パターンに近いという認識のもと、少数のニューカマーの文化に大多数のネイティブの文化が長い時間をかけて同化・融合していくという図式で説明した。

突帯文系土器を使う人びとと遠賀川系土器を使う人びとの違いは、次

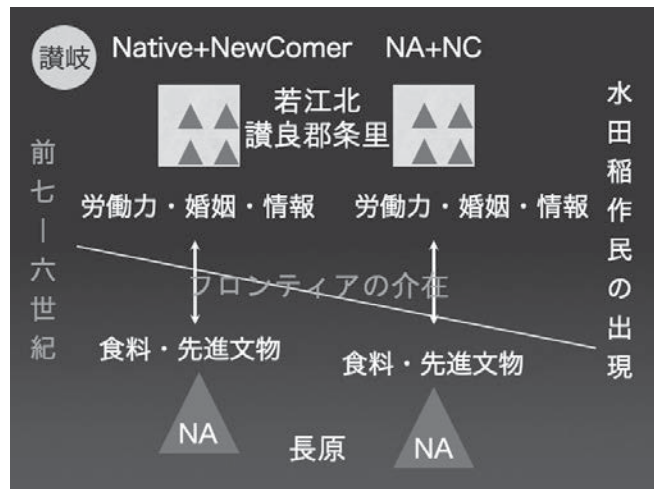


図14 縄文農耕民と弥生農耕民の出会い(紀元前6世紀)

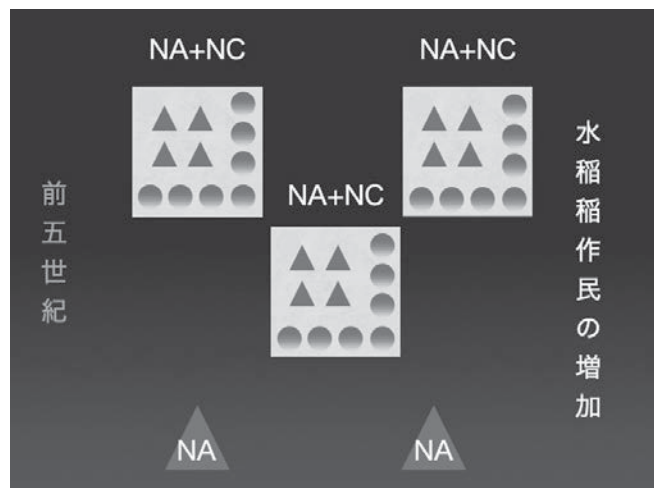


図15 縄文農耕民と弥生農耕民との同化・融合の進行(紀元前5世紀)

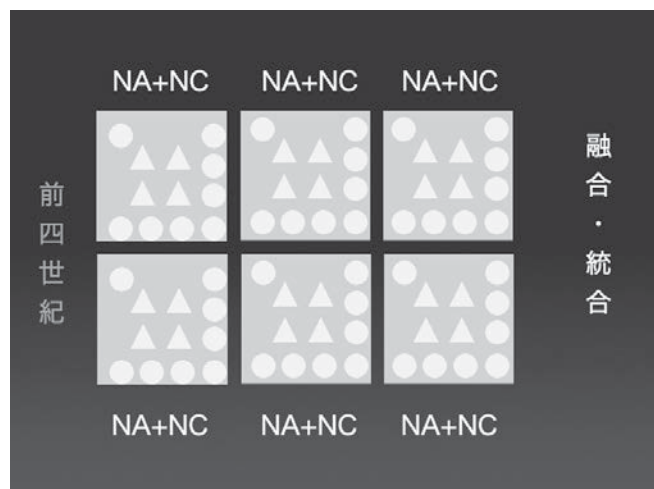


図16 弥生農耕民の成立(紀元前4世紀)

のように説明することができる。長原遺跡のように標準甕を作らず突帯文系甕だけを作りつづける村は、農耕をおこなっていても縄文農耕（園耕）の段階に留まる村で、地元民だけから構成される。フロンティアを供給する側にたつ母村ともいえよう。

それに対して、ニューカマー単独の村、すなわちコロニーの存在を示す村はいまだ確認されていない。残りは水走、若江北、田井中などの突帯文系甕と遠賀川系甕の両方が出る遺跡である。I期前葉の長原式新・I期古の段階の土器は、弥生化した突帯文系甕と、定型化する以前の、屈曲型一条甕を祖型とする標準甕という組合せなので、その比率まではわからないものの水田稲作をおこなうネイティブと、ニューカマーから構成される集団ということになる。

そしてこの段階の水田稲作は、定型化した灌漑施設をもつ以前の原初的な水田でおこなわれた小規模なものであった。近畿前期社会が確立するI期中段階までの約100～150年間は、同化・融合した若江北や水走遺跡において近畿独自の標準甕を創造していく動きがゆっくりと進行していたのである。

註

(1)——水田稲作を中心とする日本列島独自の生活に適した煮炊き用土器を創り出す過程で生み出されていく甕のうち、外反口縁化することによって、板付I式・遠賀川系甕成立への動きをする甕を指す。

(2)——[小林ほか2008]では、各型式の較正年代を次のように考えている。長原式古：紀元前800～650年、長原式新：紀元前650～500年、唐古・鍵遺跡の長原式新は、紀元前5世紀まで残る。

参考文献

- 秋山浩三 1999：「近畿における弥生化の具体相」（『論争吉備』189-222，考古学研究会）。
- 小林謙一・春成秀爾・秋山浩三 2008：「河内地域における弥生前期の炭素14年代測定研究」（『国立歴史民俗博物館研究報告』17-50，139集）。
- 田中清美 2000：「河内潟周辺における弥生文化の着床過程」（『突帯文と遠賀川』867-900，土器持寄会論文集刊行会）。
- 中西靖人 1984：「前期弥生ムラの二つのタイプ」（『縄文から弥生へ』120-126，帝塚山大学考古学研究所）。
- 中西靖人 1992：「農耕文化の定着」（『新版日本の古代』5—近畿一，93-118，角川書店）。
- 春成秀爾 1990：『弥生時代の始まり』UP考古学選書11，東京大学出版会。
- 春成秀爾 2007：「近畿における弥生時代の開始年代」（『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代のはじまり第2巻，20-34，雄山閣出版）。
- 藤尾慎一郎 1991：「水稲農耕開始期の地域性」（『考古学研究』38-2，30-54）。
- 藤尾慎一郎編 2001：『弥生文化成立期の西日本・韓国の土器』考古学資料集19，国立歴史民俗博物館。
- 藤尾慎一郎 2003 a：『弥生変革期の考古学』同成社。
- 藤尾慎一郎 2003 b：「近畿における遠賀川系甕の成立過程」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集，45-66，歴博開館20周年記念論文集）。
- 藤尾慎一郎 2007：「土器型式を用いたウィグルマッチ法の試み」（『国立歴史民俗博物館研究報告』137，157-184）。
- 森岡秀人 1990：「稲作はどのように広がっていったか」（『争点日本の歴史』1，203-219，新人物往来社）。
- 若林邦彦 2002：「河内湖周辺における初期弥生集落の変遷モデル」（『環瀬戸内海の考古学』上巻，225-239，平井勝氏追悼論文集刊行会）。
- Dennel, R.W. 1985: The hunter-gatherer/agricultural frontier in Prehistoric temperate Europe. In S.W. Green & S. M. Pelman (eds.) dAcademic Press, INC.
- Zvelevil, M. & Rowley-Connwy, P. 1984: Northern Europe; a hunter-gatherer's perspective. *Norwegian Archaeological Review* 17, 104-128.

Interaction between the Jomon Farmer and the Yayoi Farmer in the Beginning of the Yayoi Period along the Old Kawachi Lake

FUJIO Shin'ichiro

This paper considers the process and mechanism by which wet rice cultivation began in the Osaka Plain, using the Frontier Theory from European prehistoric archaeology. For about the past 30 years or so there have been two broad approaches when discussing the question of the beginning of wet rice cultivation in this region. According to one, rice farmers from further west of the region came and settled, and interaction began while coexisting with the Kinki Jomon man hunters and gatherers who had already lived there for some time, resulting in the spread of wet rice cultivation. These are the "migration and outsider" and "segregation" theories. Then there is the "indigenous" theory, according to which Kinki Jomon people obtained wet rice cultivation technology and became farmers. The basis for these two interpretations is the relationship between Jomon implements presumed to have been used by native inhabitants and the Onga River implements presumed to have been used by people from the west. That is to say, these interpretations are based on whether both existed simultaneously or whether there was a time interval. Since there are virtually no known archaeological sites in the Osaka Plain where these two groups of implements have definitely been found together, so far a decisive factor with the potential to determine either simultaneous coexistence or a time interval has been lacking.

In the study described here, a comparison using the calibrated calendar years for the groups of implements calculated based on C 14 values of carbonized materials adhering to the two types of implements revealed that some items in both groups existed at the same time. This period extends for as long as 100 to 150 years. What is more, rice paddies at this time did not have standardized irrigation systems and the implements themselves belong to the stage prior to the standardization of Yayoi implements. Consequently, this represents a preparation period for Jomon society to make the switch to Yayoi society after they had started cultivating rice, which means that standardization required a period of 100 to 150 years.

As a result of interaction between a small number of newcomers and a large number of natives in the Osaka Plain in the beginning of the Yayoi period when characteristics of Jomon culture were still much in evidence, the culture of the newcomers took more than 100 years to become integrated across the entire region. This is similar to Frontier Theory. In conclusion, the study

shows that the situation was a far cry from the conventional explanation that society developed rapidly due to the increase in the volume rice production in an extremely short time after it began.

Key Words: Interaction model, native, Nagara type pottery, Ongagawa type pottery, Old Kawachi Lake, Kinki, Yayoi